

## 頼山陽の論詩絶句と袁枚の論詩絶句

竹村，則行

<https://doi.org/10.15017/2332572>

---

出版情報：文學研究. 89, pp.1-37, 1992-03-25. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

## 頼山陽の論詩絶句と袁枚の論詩絶句

竹 村 則 行

一

頼山陽の論詩絶句二十七首は、文政十（一八二七）年、その四十八歳の年に詠まれた。ここには、平安の菅原道真から、山陽より年少の梁川星巖に至る錚々たる日本の文人が、いずれも七言絶句詩で以て簡潔に論評され、最後には頼山陽自身の論詩を配して総括する。後述する様に、その論評の対象は山陽の知友が中心であり、仲々に趣向を凝らした味わい深い文人批評詩群である。

頼山陽は、このような論評の仕方を一体誰に学んだのであろうか。論詩絶句が頼山陽の全くの独創になるといえるのは、頼山陽を含む江戸文人に大きな影響を与えた清朝の文人袁枚に論詩絶句三十八首の連作の先例があるという事実によつて大きくゆらぐ。この事実はまた、頼山陽の論詩絶句が、或いは袁枚を含む中国の詩人の直接の影響によつて詠まれたのではないかという推測を成立させるのである。

実は論詩絶句は唐の杜甫に濫觴し、その後、金の元好問、清の王士禛・袁枚など歴代の著名な文人がいずれも連作

を試みた一種の文芸批評の形式である。そして、頼山陽のそれは、当時の文壇における絶大な影響から考えても、より直接には、袁枚の論詩絶句に倣って詠まれた可能性が高い。蓋し袁枚の論詩絶句も親しい友人知人の懐古録・備忘録であった（後述）。もっとも、袁枚に反発する頼山陽はこのことを明言せず、また両者の論詩絶句は、疑いなくその対象もその表現も異にする別個の文学作品ではある。しかしながら、頼山陽の論詩絶句には、袁枚の論詩絶句の色濃い影響が認められる節節が確かにある。

そこで本稿においては、筆者は一つの試みとして頼山陽と袁枚の論詩絶句をとりあげて比較考察してみることにする。ただ、筆者は中国文学を専攻しており、その関心は主に袁枚がどのように頼山陽に影響を与えたかという点にある。日本文学に就ての見識が甚だ浅い筆者は、或いは無知なる誤りを種々冒しているであろうが、博雅の先達の御指教を乞い願う次第である。

## 二

いま、頼山陽の論詩絶句二十七首<sup>①</sup>中に論評される詩人や詩風は以下の通りである。（生没年は主に岩波書店『日本古典文学大辞典』による。）

其一 菅原道真（八四五—九〇三）

其二 村上天皇（九二六—九六七）・菅原文時（八九九—九八一）

其三 絶海中津（一三三六—一四〇五）

- 其四 上杉謙信 (一五三〇  
五七八)
- 其五 伊達政宗 (一五六七  
六三六)
- 其六 石川丈山 (一五八三  
六七二)
- 其七 新井白石 (一六五七  
七二五)
- 其八 新井白石・室鳩巢 (一六五八  
七三四)
- 其九 服部南郭 (一六八三  
七五九)
- 其十 服部南郭・秋山玉山 (一七〇二  
七六三)
- 其十一 祇園南海 (一六七六  
七五一)
- 其十二 梁田蛻巖 (一六七二  
七五七)
- 其十三 荻生徂徠 (一六六六  
七二八)
- 其十四 (山陽當時の詩風)
- 其十五 (山陽當時の詩風)

其十六 葛子琴 (一七三九)  
          (一七八四)

其十七 六如 (一七三四)  
          (一八〇一)

其十八 菅茶山 (一七四八)  
          (一八二七)

其十九 武元登登菴 (一七六七)  
          (一八一八)

其二十 市河寬齋 (一七四九)  
          (一八二〇)

其二十一 大窪詩仏 (一七六七)  
          (一八三七)

其二十二 菊池五山 (一七六九)  
          (一八四九)

其二十三 柏木如亭 (一七六三)  
          (一八一九)

其二十四 館柳湾 (一七六二) · 田能村竹田 (一七七七)  
          (一八四四) · (一八三五)

其二十五 梁川星巖 (一七八九)  
          (一八五八)

其二十六 頼山陽 (一七八〇)  
          (一八三二)

其二十七 頼山陽

この一覽から、頼山陽の論詩絶句中に論評される対象が、ほぼ時代順に配列されていることが明らかとなる。且つその配列は、私の見るところ、以下の幾つかの群に分類することが可能である。即ち、A群（其一一其五）として、江戸以前の古人の故事を記したものの、B群（其六一其十三）として、頼山陽生前の江戸前期の詩風詩人を評したものの、C群（其十四其二五）として、頼山陽に深く関わった江戸中後期の詩風詩人を評したものの、そして最後にD群（其二六、二七）として、頼山陽自身の自己批評を附して総括するという分類である。

この頼山陽の論詩絶句の内容について、或いは国文学方面に於ては既に自明であるのかも知れないが、門外の私は、以後の叙述に便ならしむる為、以下この分類に従つて概要を見てゆくことにする。

まずA群（其一一其五）の論詩に就て。其一一に述べる菅原道真の「九月十日」<sup>②</sup>詩、其四に述べる上杉謙信の「九月十三夜」<sup>③</sup>詩、及び其五に述べる伊達政宗の「遣興吟」<sup>④</sup>は、奇しくもいずれも津阪孝綽『夜航詩話』<sup>⑤</sup>卷一中に集中して載録されている。頼山陽のこれらの論詩絶句と『夜航詩話』との関係は明らかでないが、これらが当時においてもよく知られた話柄であつたことは間違いないであろう。また其二に言及する村上天皇と菅原文時が作詩を競つた故事は、大江匡房『江談抄』第五、及び『今昔物語』第二四にも採られており、既に人口に膾炙した故事である。また其三には、

衣中廿八顆明珠 衣中ほうずの廿八顆の明珠（七絶）は

風雅終然墮筍蔬 風雅 終然ついにに筍蔬に墮するに

出類故當推絶海 類いづより出るは 故もとより當まさに絶海（中津）を推すべし

指揮如意掣鯨魚 指揮すること意の如くして 鯨魚をも掣するなり

と述べて、二十八字の七絶に長じた五山の詩僧絶海中津を絶讃するが、これもいわば定評であって、頼山陽の独自の評価を下したものと認められない。これを要するに、A群の論詩は、従来よく知られた古人の故事を巧みに論詩にまとめあげた技量こそ賞められるものの、その後が続く一連の論詩絶句とは違って、頼山陽独自の確固たる文学主張がここに現れているとは考えにくいのである。されば、この部分は、いわば一連の論詩絶句の序段であって、頼山陽の論詩の主意はここには無いと言えるであろう。

次にB群の論詩（其六―其十三）は江戸前期中期の文人の論評である。頼山陽はここで、徂徠―南郭の所謂古文辞派の詩風を排斥する一方、正徳四家（白石・玉山・南海・蛻巖）の詩風を高く評価する。まず其六は石川丈山評である。

抛劍援毫豈等閑 劍を抛て 毫を援るは 豈に等閑ならん

現身欲列古仙班 現身 古仙の班に列せんと欲す

領他三十六峰碧 三十六峰の碧を領他するも

却乞殘烟向五山 却って殘烟を乞ひて 五山に向はんとす

山陽はここで、石川丈山は結局は五山文学の餘習を脱し切れなかったとして、なかなか辛辣に論評する。按ずるに、盛唐を鼓吹した格調中心の丈山の詩論に、山陽は古文辞派と軌を一にする主張を認めたものらしく思われる。続いて其七、

正徳諸公盡出群 正徳の諸公は 尽く群を出で

駭雞雄雉各爭文 駭雞 雄雉 各おの文を争ふ

翻空千仞求威鳳 空を翻ること千仞 威鳳を求めんとすれば

當屬筑州源使君 當まに筑州の源使君(新井白石)に属すべし

自注に「白石先生、正徳の諸官中に於て文采と筆力とを兼ね具ふ」と稱讚する新井白石評である。山陽はその「書正徳四家詩鈔後」に於て、

正徳諸公中、余は(新井)白石・(秋山)玉山・(祇園)南海・(梁田)蛻岳の四先生に推服す。

と述べており、白石を始めとする正徳の四家を高く評価する。本論詩絶句に於ても、以下正徳四家への讃辭が続く。次で其八、

白石滄浪書牘存 (新井)白石・滄浪(室鳩巢)の書牘存し

詩中商略用朱門 詩中の商略に 朱門を用ふ

誰知麗藻非假僞 誰か知らん 麗藻は假僞には非ずして

前輩文章本細論 前輩の文章 本もと細論するを

ここで山陽は、新井白石と室鳩巢の往復書簡を取り上げ、「前輩」たる新井白石への尊崇の念を示している。(但し、白石は基本的には古文辞派の主張を踏襲している様に思われる。古文辞派を排斥する山陽がこのように白石を高く評



価するのは、正徳の学風を切り開いた白石の先鞭的業績に着目したからであろうか。なお、白石と鳩巢の詩評に「室新詩評」がある。続いて其九、

口角宮商音響浮

口角の宮商 音響浮く

句中義味未深求

句中の義味 未だ深く求めず

一生不解子遷好

一生解せず 子遷（服部南郭）の好きを

兩岸秋風下二州

「兩岸の秋風 二州を下る」とは

ここで頼山陽は、服部南郭の「夜下墨水」<sup>①</sup>詩の結句を引合いに出して、南郭詩の好きがまるで理解できぬと南郭への批判を強める。

次で其十においては、山陽は南郭と玉山とを対比する。

羽橋何及玉山光

羽橋（服部南郭） 何ぞ（秋山）玉山の光あるに及ばん

野鶩家雞枉抑揚

野鶩 家雞 枉まげて抑揚するのみ

不解藁砧鴻雁語

解せず 「藁砧」「鴻雁」の語の

勝他太白對流黃

「太白」の「流黃」に対するに勝他するを

「藁砧」「鴻雁」は服部南郭「古意」<sup>⑬</sup>詩の語であり、一方「太白」「流黃」は秋山玉山の「古意」<sup>⑭</sup>詩の語である。ここでは頼山陽は、服部南郭と秋山玉山の「古意」詩を対比しつつ、玉山の方が秀れているとして軍配を拵げるのであ

る。このように山陽の南郭批判は終始徹底している。次で其十一、

儻儻縹緲恰相宜 儻儻縹緲として 恰も相宜し

猥瑣何堪被肉絲 猥瑣 何ぞ肉糸うごえを被るに堪へん

欲把金丹換凡骨 金丹を把りて 凡骨に換へんと欲せば

試吟南海竹枝詞 試みに吟ぜよ (祇園) 南海の竹枝詞

正徳四公の一人である祇園南海の竹枝詞に頼山陽がいたく共鳴することは、その「跋南海手書竹枝卷」<sup>15</sup>の次の記事にも見えるものである。

余嘗て竹枝の一体を論ず。要は質俚儻儻中に縹緲の音を寓し、歌謡の本色を失はざるに在り。

なお頼山陽自身の竹枝詞については、神田喜一郎「日本における中国文学Ⅰ」<sup>16</sup>に紹介がある。次で其十二、

海内文章落布衣 「海内 文章 布衣に落つ」

偶然七字是珠璣 偶然の七字 是れ珠璣たまなり

登高唯有梁翁賦 登高 唯だ梁 (田蛻巖) 翁の賦する有り

解道連雲秋色飛 解よく道いふ 「連雲秋色飛ぶ」と。

これも正徳四家の一人梁田蛻巖の「九日」<sup>17</sup>詩の句意を賞讃したものだ。「海内文章落布衣」「登高」「連雲秋色飛」は

いづれも該詩からの引用である。

続いて其十三は、当の古文辞派の大きな據り所であった『唐詩選』批判である。

濟南選法本澶漫

濟南（李攀龍）が選法 本と澶漫ほしいままなり

抉剔何須後手刊

抉剔 何ぞ後手の刊するを須またん

金匱不醫徠翁眼

金匱も （荻生徠）徠翁の眼を医せず

猶從五里霧中看

猶ほ五里霧中よ從り看るなり

ここで頼山陽は、服部南郭校訂の李攀龍輯『唐詩選』、及びそれに跋を附した古文辞派の領袖荻生徠を厳しく批判する。跋文の中で徠は、南郭の校訂について「よく五里霧中を払った」と賞讃しているが、山陽は更にこれを返して揶揄したのである。

以上、B群の論詩絶句は、頼山陽が江戸前期に盛行した古文辞派の徠―南郭の詩風をムキになって排斥する一方で、白石・玉山・南海・蛻巖ら正徳四家の詩風を高く評価した点に特徴があると言えるであろう。

次にC群（其十四―其二十五）の論詩になると、時代的にも精神的にも頼山陽に随分近い先輩や同輩の知人友人が登場して、山陽の論調は俄然熱気を帯びて来る。まず其十四、

萬卷揮腸筆有神

万卷 腸を揮なへて 筆に神有り

空疎何敢議前人

空疎 何ぞ敢て前人を議せんや

始知翰墨關時運

始めて知る 翰墨の時運に関わるを

文化何如正徳春 文化 正徳の春に何如?

自注に「近日の諸君、享保諸公の詩を笑ひて陳腐と為す」とある。この論詩の内容について、神田喜一郎先生に適確な注釈があるので、次に引用させていただく。

正徳のころの人は、みな深い学問があつたので、おのづからその筆に神があつたが、いまの人は学問が空疎で筆に神がない。それにも拘はらずいまの人は、どうかすると、正徳の詩をかれこれ非難するが、もつてのほかのことである。山陽は、かういつて当時の人を戒めもしたのである。

続いて其十五、

歴城何及慶陽才 歴城(李攀龍) 何ぞ慶陽(李夢陽)の才に及ばん

偽體從來缺別裁 偽體 從來 別裁を缺く

竹垞漁洋渾不省 竹垞(朱彝尊)・漁洋(王士禛) 渾なかへりみ省かへりみずして

復爲滿口說袁枚 復た滿口 袁枚を説くを為す

ここにも第一句に中国古文辞派の領袖たる李攀龍批判がある。この論詩は同時に、朱彝尊や王士禛の良さを見識を以て見直すことなく、徒に流行を逐つて袁枚をのみ賞めそやす当時の文壇の無定見な風潮を譏つたものである。山陽は更に、文化十年閏六月に詠んだ「夜読清諸人詩、戲賦」詩の中でも、袁枚について触れ、

倉山浮囂筆輸舌 倉山(袁枚) は浮囂にして 筆は舌に輸し

頼山陽の論詩絶句と袁枚の論詩絶句(竹村)

心怕二子才縱横 心に二子の才の縦横なるを怕る

如何此間管窺豹 如何ぞ此の間管より豹を窺ひ

唯把一袁概全清 唯だ一袁を把りて全清を概せんや

と述べる。これも同様に、袁枚一人をして盲目的に全清を代表させるわが国文人の知見の無さを批判するものである。入谷仙介氏の指摘の如く、筆者もまた、山陽は「袁枚に対して点が辛い、袁枚と山陽とは詩風があい通じて」<sup>21</sup>いるという考え方に立つ。

以上は山陽当時の文化文政期の文壇批判であったが、其十六以下は具体的な文人名をあげて論評する。まず其十六、

浪速城中朋盃簪 浪速城中に朋盃簪り

猶從嘉萬索金鍼 猶ほ嘉(靖)・萬(曆)に従って金鍼を索む

茫茫混沌新穿竅 茫茫たる混沌に新たに竅を穿つは

唯有多才葛子琴 唯だ多才の葛子琴有るのみ

古文辞派に新機軸を打ち出した大阪混沌社の傑材たる葛子琴を評したものである。葛子琴は頼山陽の父頼春水と親交があった<sup>22</sup>。次に其十七、

泥犂口業未成空 泥犂の口業未だ空と成らず

呈佛祇當彫琢工 仏を呈するは 祇だ当に彫琢の工によるべし

栲叟草廬家數小 栲叟(村瀬栲亭)・(龍)草廬も 家數小さからん

鉢孟還出渭南翁 鉢孟 還かへつて渭南翁(陸游)を出だす

但徠派の詩文に抗し、宋詩の風潮を開いた詩僧六如を評したものである。菊池五山「五山堂詩話」卷一にも「六如禪師、詩名一世を籠罩す。人、鉢孟中の陸務観を以て之を称す」とある。山陽の「題六如手書詩卷」の中でも、「余、六如師の名を聞きて、之を景慕する者十餘年矣」とあって、六如への篤き思慕を述べる。次に其十八、

朱絃疏越愛鏗鏘 朱絃疏越(25)し 鏗鏘たるを愛す

風格誰爭老禮卿 風格 誰か争はん 老礼卿(菅茶山)

大句寧無排暴力 大句は 寧むしろ排暴(26)の力無からんも

終然(27)五字是長城 終然(27)に 五字 是れ長城なり

頼山陽の父執であり恩師でもあった菅茶山評である。大句(七古)よりむしろ短古(五古)に長けた菅茶山の風格を賞する。山陽はその「書六如・茶山・西野集鈔後」に於ても、「茶山・六如は皆短古(五古)に長じて、長古(七古)に短かし」と評している。なお頼春水「師友志」(卷三)に載せる菅茶山伝は頼山陽が補足したものである。更に山陽には「茶山先生行状」<sup>(28)</sup>「菅茶山翁遺稿序」<sup>(29)</sup>等、父執たる菅茶山について記した詩文は頗る多い。次に其十九、

虎鳥龍蛇耳怕聞 虎鳥 龍蛇 耳に聞くを怕れ

頼山陽の論詩絶句と袁枚の論詩絶句(竹村)

褊裨宜憚勒千軍 褊裨 宜しく憚るべし 千軍を勒するを

論衡帳裡家家在 衡を論ずるは 帳裡 家家に在るも

開闢誰稱武景文 開闢より 誰か称す 武(元)景文

名著『古詩韻範』を著し、兵法にも似て堂々たる詩法の論陣を張った武元登登菴を讃える。頼山陽はその『古詩韻範』序においても兵法と詩法の類似性を述べている。登登菴は文化五年以来、文政五年に没するまで頼山陽の終生の親友であった。山陽は「登登行菴記」「登登泛菴記」をはじめ、登登菴について記した多くの詩文を残す。次に其二十、

河叟憐才如海涵 (市)河叟(寛斎) 才を憐むこと海の如く涵し

種桑養就吐絲蠶 桑を種ゑ 養ひ就く 絲を吐く蠶

可知樂易心遙契 知るべし 樂易 心に遙かに契うを

前學香山後劍南 前に香山(白居易)を学び 後には劍南(陸游)

江湖派の領袖として柏木如亭・大窪詩仏・菊池五山など多くの俊才を養成し教育した市河寛斎評である。寛斎もまた古文辞派の主張を斥けた一人であった。山陽はその自注に「西塾翁は育才に長ず。江湖社を開き、名手輩出す。」と述べている。次に其二十一、

自號詩佛意如何 自ら詩仏と号するは 意如何?

千偈瀾翻任口哦

千偈瀾翻として 口に任せて哦うたふ

教化縱然非廣大

教化 縱然たとえ 廣大に非ざるも

濟人不墮阿修羅

人を濟すくへば 阿修羅には墮おちざらん

同じく江湖社の俊才たる大窪詩仏評である。自注にも言及する袁枚の「詩仏歌」は『隨園詩話』補遺卷三に載せる。次に其二、

學吟爭願五山知

吟を学ぶもの 争ひて(菊池)五山に知らるるを願ふ

寸舌權衡海内詩

寸舌 權衡す 海内の詩

却恨管絃非太曆

却って恨む 管絃は大曆に非ずして

嬌喉不索十郎詞

嬌喉 十郎の詞を索もとめざるを

やはり江湖社の四才子の一、菊池五山33評である。一二句は、その著『五山堂詩話』に袁枚の『隨園詩話』にも似て弟子や無名詩人の詩を載せ、為に海内の詩人が争つて五山に知られる事を願うに至ったことをいう。自注により、三四句はその「深川竹枝33」三十首を言う。蓋し唐代才子佳人の愛情小説『霍小玉伝』中の「大曆」の才子李益(十郎)を菊池五山に比して言ったものか。また『五山堂詩話33』巻五には、五山が十一歳年少の頼山陽を評して「此の如き才人、我將まに黄金を鑄て之に事へんとするなり」と述べている。次に其三、

柏昶爲詩有別才 柏(木)昶(如亭) 詩を為つくりて別才有り

頼山陽の論詩絶句と袁枚の論詩絶句(竹村)



空腸直吐性靈來 空腸 直だ性靈を吐き来る  
稜稜吟骨無收處 稜稜たる吟骨 收むる処無く  
埋向空山土一堆 空山の土一堆もりに埋むるのみ

同じく江湖社の逸材たる柏木如亭評である。第一句は宋・嚴羽『滄浪詩話』「詩辨」に「詩に別材有り」とあり、第二句「性靈」も袁枚の常用語である。第四句は如亭が京都に客死した事をいう。山陽は「如亭遺稿序」<sup>37</sup>を撰してその奇才を愛惜している。次に其二四、

時好遷移如循環 時好の遷移するは 循環するが如く  
百年唯鬧宋明間 百年 唯だ宋・明の間に鬧かまひすしきも  
誰從唐尾占閑地 誰か唐尾に従ひて 閑地を占めん  
西有竹田東柳灣 西に(田能村)竹田有れば 東には(館)柳灣あり

これは中晩唐を表彰した館柳灣と中唐の大曆諸家を愛した田能村竹田評である。二人とも山陽の親友であった。<sup>38</sup> 続いて其二五、

織女機絲巧剪裁 織女の機絲 剪裁を巧みにす  
江湖數子各仙才 江湖の數子 各おの仙才なり  
誰知白兔迷離眼 誰か知らん 白兔(梁川星巖)の迷離の眼

却竊蟾宮靈藥來

却って

蟾宮の靈藥を竊んで来るを

同じく江湖社の同人であり、再従妹にあたる十五歳年下の詩人紅蘭女史と結ばれた梁川星巖（字は伯兔）を軽く擲揄したものである。星巖は山陽より九歳年少で、「文は山陽、詩は星巖」と称されて親しい詩友であった。山陽には「梁星岳西征詩序」<sup>39</sup>その他の星巖について記した詩文がある。

以上、C群の其十四―其二五の論詩は、山陽当時の文壇の批評も含め、山陽より少し先輩にあたる文人や、或いは江湖社の同人たる同時代の文人を熱っぽく論評している。いうまでもなくこの部分こそが、一連の論詩絶句中において山陽が最も力を込めて論評した要諦であったであろう。この山陽の論詩絶句が詠まれた翌々年、文政十二年刊の加藤淵『文政十七家絶句』には、頼山陽がここに論評した菅茶山・市河寛齋・館柳湾・柏木如亭・大窪詩仏・菊池五山・田能村竹田・頼山陽・梁川星巖等々の文政期を代表する詩人の絶句がいずれも採録されているのを見ても、ここにあげたC群の詩人が山陽と息吹きを同じくする同時代人であったことが歴然とするのである。次にD群として其二六、

評姿群觀宋元膚 姿を評しては 群り觀る 宋元の膚

論味爭收中晚映 味を論じては 争ひ收む 中・晚の映

斷粉零香合時嗜 斷粉 零香 時の嗜みに合するに

問君何苦學韓蘇 君に問ふ 何を苦しんで韓・蘇を学ぶやと

この論詩も神田先生に簡潔な要約があるので、引用させていただきます。

いまの詩人は、姿といふと、宋や元の詩の膚合ひの美しいのを喜び、味といふと、中唐や晚唐の詩の旨いのを好

み。これがこんにちの嗜好で、とかく断粉零香、すなはち艶つばいものでなければ歓迎しない。しかし、自分はかういふのは嫌ひで、唐の韓愈（退之）や蘇軾（東坡）の剛健な作品が好きなのであるが、人はよく自分にお前は何故そんなに時好にあはないものを学ぶのか、と問うてかかる。かういふのがいまの詩の大意であるが、この裏には、暗に自分こそ雞群の孤鶴で、前に詠じた寛齋、詩仏、五山、如亭、柳灣、星巖などの詩は詰らないものだ、といふ意を寓したのである。

山陽には「書韓・蘇古詩鈔後」がある。この論詩は、実は当時の詩風批判に藉りて、山陽が自己の文学観を開陳したものである。次、最終其二七の主張に直結するものといえる。

文章於世本纖塵　　文章は世に於いて　本と纖塵にして

唯恐頹波没舊津　　唯だ恐る　頹波の旧津を没するを

欲掣鯨魚無氣力　　鯨魚を掣せんと欲するも　氣力無く

半生徒被喚詩人　　半生　徒に詩人と喚ばるるのみ

第三句「鯨魚を掣す」とは氣宇壮大な詩文の喩えであり、其三にも同様の表現がある。山陽はこの論詩絶句の総結において、「半生」（この年山陽四八歳）早や氣力も失せ、徒に詩人と呼ばれる自分をシニカルに批評しているが、これは無論、眞の詩人たらんとする山陽の強い決意表明にはかならないであろう。

以上、頼山陽の論詩絶句二十七首について見てみると、以下の構図が明確に浮びあがって来る。即ち、其一―其五までは今一つ一貫した文学主張が判然としないものの、其六―其十三の論詩は江戸前期の文人のうち、特に正徳四公を賞讃して、徂徠―南郭の古文辞派を貶斥したもの、其十四―其二十五の論詩は山陽当時の江戸後期の文壇批判を含ん

で、先輩や同輩の友人知人を熱っぽく論評したもの、そして最後に、山陽は自己批評の論詩を附して一連の論詩を総括するという構図である。このような山陽の論詩絶句の構造は、その形式から見るとすれば、実は中国の歴代文人の論詩絶句、就中袁枚の論詩絶句の強い示唆を受けたものであることを、次章以下において考察してみたいと思う。

### 三

論詩絶句は唐の杜甫に濫觴を見て以来、金の元好問、清の王士禛、袁枚をはじめ、その後杜甫に傾倒する歴代の著名な詩人がいずれも数多く擬作を試みた一種の文芸批評、文学主張の形式である。<sup>42</sup>本章では、頼山陽の論詩絶句への影響を考ふる為、以下それぞれの論詩絶句の特徴について、その要点を確認しておくことにする。

七六一年、杜甫五十歳の年に詠まれた「戯爲六絶句」は、実はかなり難解な論詩絶句であるが、初盛唐当時の文壇の風潮に対する杜甫の不満と批判とを述べた点では衆目の一致するところであろう。即ち、目加田誠先生の次の解説がほぼ正鵠を得ていると思われる。

これは作者の一種の詩論である。恐らく当時後輩の詩人たちが、いたずらに大きなことばかり言って、前代の詩人をあなどり、実は力がそれに伴わぬことを憎みからかう気持ちがあったので、わざと戯れに、と題したのである。杜甫自身の詩が彼らに重んじられぬことに対する不満もあつたのではあるまいか。

杜甫は該詩に於て、北周の庾信や初唐の四傑に及ぶべくもない今人の詩風にシニカルな批評を加えるが、例えば其四は次の様である。

才力應難跨數公　才力は応に數公を跨ぐに難かるべし

頼山陽の論詩絶句と袁枚の論詩絶句（竹村）

凡今誰是出羣雄 凡今 誰か是れ 出群の雄ならん

或看翡翠蘭苔上 或ひは翡翠を蘭苔の上に看んも

未掣鯨魚碧海巾 未だ鯨魚を碧海中に掣せず

ここには当時の文壇に対する杜甫の批判が露わである。なお第二句「出群」は頼山陽の「論詩絶句」其七に、また第四句「掣鯨魚」は同じく其一二七にそのまま取られている。

次に元好問の「論詩三十首」は一二一七年、その二八歳の年に詠まれた。それが杜甫の「戲爲六絶句」に倣って詠まれたものであることは、既に錢大昕『十駕齋養新録』卷十六「論詩絶句」の項に明確に指摘している。該詩において元好問は、「天然」「真淳」「古雅」「精純」という概念を準用しつつ、杜甫や陶淵明に最大の敬意を払っている。そのようにして建安の詩風への復古を主張する一方で、黃庭堅を中心とする江西詩派文人を鋭く批判するのである。江西詩派は主に北宋末を中心に燃え熾った詩風であるが、元好問の当時に於ても、まだその余勢が強く残っていたものと思われる。ここには其一と其三十とを引用して、元好問「論詩三十首」の首尾を窺うことにする。まず其一、

漢謠魏什久紛紜 漢謠・魏什は 久しく紛紜として

正體無人與細論 正体は 人の与ともに細論する無し

誰是詩中疏鑿手 誰か是れ 詩中の疏鑿手たりて

暫教涇渭各清渾 暫らく涇・渭をして各おの清渾ならしめん

ここには、久しく乱れた漢魏以来の「正体」を新たに切り開くべく、若き詩人元好問の崇高なる自負が窺われる。

続いて其三十、

撼樹蚍蜉自覺狂

樹を撼る蚍蜉 自ら狂なるを覚ゆ

書生技癢愛論量

書生の技癢 論量を愛す

老來留得詩千首

老い來りて 詩千首を留め得れば

卻彼何人校短長

卻って何人にか短長を校べられん

これは、身の程知らずにも「論量」を愛する自分を、韓愈「調張籍」詩の表現を借りて「樹を撼る蚍蜉」に喩えた自己評価である。ここにも二十代の元好問の意気軒昂さが顕わである。論詩絶句をこの様に自分自身の論詩で締め括るやり方は、この後、王士禛や頼山陽も倣ったものであり、ほとんど定式になった感がある。

次に王士禛の「戲仿元遺山論詩絶句」は、一六六三年、その三十歳の年に詠まれた。表題が示す通り、元好問に倣って建安以来の文学を論評し、やはり最後は自己批評の論詩で締め括っている。しかし、清初という王士禛の生きた時代を反映して、その論評の中心は当時の文壇に色濃く残っていた何景明、李夢陽らを含む明代文学の餘滓であった。

ここではその典型として、其二三に見られる何景明評と其三五の自己批評の論詩絶句に就て見ることにする。まず其

二三、

接跡風人明月篇

跡を風人に接ぐ 「明月篇」

何郎妙悟本従天

何郎（景明）の妙悟は 本と天従りす

王楊盧駱當時體

王・楊・盧・駱は當時の体なり

頼山陽の論詩絶句と袁枚の論詩絶句（竹村）

莫逐刀圭誤後賢　刀圭を逐ひて　後賢を誤る莫れなま

ここで王士禛は、何景明の「明月篇」に就て、「風人」に跡を接する「妙悟」が有るとして評価する。なお第三句、「王楊盧駱當時體」は杜甫「戲爲六絶句」其二の表現そのままである。次に其三、五、

九歳詩名銅雀臺　九歳にして　銅雀台に詩名あるも

三年留滞楚江隈　三年　楚江の隈に留滞す

不如解唱黄鸝者　如しかず　解よく黄鸝を唱ふる者の

新自王戎墓下來　新たに王戎の墓下より来るに

この詩は王士禛自身を述懐したものである。九歳にして既に詩名があった王士禛は、三年の間「楚江」（揚州）にくすぶり続ける自分の宦途をやや悲観的にみつめる。後には刑部尚書になるまでに出世する王士禛であるが、この時三十歳のみぎりには、如才なく立ち回る処世態度を容認できなかった事が、この論詩の三四句の心情独白から窺える。

以上、杜甫、元好問、王士禛の論詩絶句に就てそのあらましを見て来たが、これらの代表的な論詩絶句から、今その特徴を以下の様にまとめる事が可能であろう。

(一) 論詩絶句中に論評する対象は、多く作者の当時の文壇に強い影響を及ぼしている詩人であり、詩風であること。例えば杜甫における「爾曹」、元好問における「江西詩派」、王士禛における明代古文辞派など。

(二) そして、作者はこれらの当面する問題に厳しく対峙するべく、論詩絶句において自己の文学主張を試みたもの

であること。例えば杜甫における建安文学への復古、元好問における陶淵明、杜甫の「真淳」「天然」への傾倒、王士禛における「妙悟」の主張等である。

(三)その主張は、むしろ正面切った詩人論、文学論ではないかも知れないが、しかし論詩絶句中に盛られた思想はいずれも真摯であること。(杜甫の「戯」はなるほど戯態をとるものの、その主張は至って真剣である。)従って論詩絶句は一種の文学批評として十分に機能し得ること。

(四)これに関連して、末尾の自己論評に見られる様に、作者はしばしば論詩絶句中に於て自分自身を論評した論詩絶句を試みていること。これは、蓋し論詩絶句が一種の文学主張であれば当然のことであろう。

さてここにあげた論詩絶句をめぐるこれらの特徴は、続く袁枚の論詩絶句に於ても、幾らかの変調を含みながら、概ねそのまま色濃く踏襲されている所である。

#### 四

袁枚の「倣元遺山論詩」<sup>45</sup>三八首は一七八一年、その六六歳の年に詠まれた。元好問の論詩絶句が二八歳、王士禛のそれが三十歳の若年に詠まれたのに較べれば、論詩絶句を詠んだ時の袁枚は既に詩人として老成していたと言えるであろう。この年齢差は、当然それぞれの論詩絶句の論評の姿勢にも反映する。即ち、元好問や王士禛の論詩絶句は、既に概説した様に、当時の文壇に跋扈していた前時代の余風に対して厳しく対決する青年詩人の姿勢が濃厚であるが、袁枚の論詩絶句について言えば、確かに文人批評の姿勢はあるものの、むしろ詩中に論評する詩友知友の備忘録、乃至は懐古録の様相を態し、家長を囲むなごやかな一族団欒の雰囲気さえ呈するのである。この雰囲気由来する処は、題下に付した次の序から明らかである。



遺山（元好問）の論詩は古多く今は少なし。余は古少なく今多し。懐人を兼ねるが故なり。其の未だ見ざる所と、見ると雖も而も胸中に軒輊する所無き者とは、俱に闕如す。

この序から、袁枚の論詩絶句中に論評される詩人は、概ね袁枚と同時代の評価の定まっている詩友であるということになる。そこで以下に、袁枚の論詩絶句中に論評された詩人について一覽することにする（下欄は関連記事）。

其一 ●王士禛（一六三四）  
（袁枚『隨園詩話』卷三）

其二 ●吳偉業（一六〇九）  
（一六七二）

其三 高其倬（一六七六）  
（一七三八）  
（袁枚「高文良公神道碑」文集卷二）  
◇「高文良公味和堂詩序」文集卷十

其四 張廷玉（一六七二）  
（一七五五）  
●鄂爾泰（一六七七）  
（一七四四）  
（袁枚「鄂文端公行略」文集卷八）  
◇『隨園詩話』卷三・六

其五 查慎行（一六五〇）  
（一七二七）  
（袁枚『隨園詩話』卷四・八）

其六 楊守知（一六六九）  
（一七三〇）  
（袁枚『隨園詩話』卷二）

其七 湯右曾（一六五六）  
（一七二二）  
（袁枚『隨園詩話』卷八）

其八 ●潘耒（一六四六）  
（一七〇八）  
●黃之雋（一六六八）  
（一七四九）  
（袁枚『隨園詩話』卷六・八）

其九 許廷鏢 (一七二九)・沈起元 (一六八五)  
(前後在世) (一七六三) (袁枚「光祿寺卿沈公行狀」文集卷八)

其十 尹繼善 (一六九五)・方觀承 (一六九八)  
(一七七五) (一七六八) (袁枚「文華殿大學士尹文端公神道碑」文集卷三)  
〃〃 「方敏恪公神道碑」文集卷三

〃〃 「送尹太保從兩江入閣序」外集卷三  
〃〃 「尹文端公詩集序」外集卷三

〃〃 「代渤海相公祭尹太保文」外集卷三  
〃〃 「謝尹太保和詩啓」外集卷五

〃〃 「六營公主兩江總督尹公去思碑」外集卷六

〃〃 「隨園詩話」卷一・二・三・四・五・六・七・八・十一・補遺卷二

其十一 黃任 (一六八三)  
(一七六八)

其十二 張鵬翀 (一六八八)・周長發 (一六九六)  
(一七四五) (袁枚「隨園詩話」卷九)

其十三 厲鶚 (一六九二)  
(一七五二) (袁枚「隨園詩話」補遺卷十)

其十四 金農 (一六八七)  
(一七六四)

其十五 杭世駿 (一六九六)  
(一七七三) (杭世駿「小倉山房文集序」文集序)

(袁枚「隨園詩話」卷四・五・八・補遺卷二)

其十六 商盤 (一七〇一)  
(一七六七) (袁枚「祭商寶意太守文」文集卷十四)

賴山陽の論詩絶句と袁枚の論詩絶句 (竹村)

其十七 胡天游 (一六九六  
二七五八)

〃〃【隨園詩話】卷三·五·七·十  
袁枚「胡稚威駢體文序」文章卷十一  
〃〃「胡稚威哀詞」文集卷十四

其十八 ○程晉芳 (二七一八  
二七八四)

〃〃【隨園詩話】卷一·五·補遺卷二·七  
袁枚「翰林院編修程君魚門墓誌銘」續文集卷二六  
〃〃「答程魚門書」文集卷十八

其十九 ○蔣士銓 (二七二五  
二七八五) · ○趙翼 (二七二七  
二八二四)

〃〃【隨園詩話】卷三·五·六·七·八·十·十三·補遺卷七  
袁枚「翰林院編修蔣公墓誌銘」續文集卷二五  
〃〃「趙雲松甌北集序」續文集卷二八

蔣士銓「讀隨園文題辭」文集題辭  
〃〃「題隨園駢體文」外集題辭  
袁枚「與蔣苕生書」外集卷四

〃〃【隨園詩話】卷一·二·三·四·五·六  
八·十一·十四·十五·補遺卷三·五

其二〇 張漁村 (??) · 符曾 (一六八八  
?) · 謝芳蓮 (??) (袁枚「隨園詩話」卷五)

其二一 ○王文治 (二七三〇  
二八〇二)

其二二 ○萬光泰 (二七一七  
二七五五) · 程衡帆 (??) · 王陸禔 (??) (袁枚「隨園詩話」卷一·七·十三)

○高文照 (二七三八  
二七七六) · 陸建 (??)

袁枚「萬栢坡詩集跋」文集卷十一  
〃〃「萬栢坡樂子集序」外集卷一  
〃〃「王介祉詩序」文集卷十  
〃〃「哭高東井孝廉序」詩集卷二五

其三 胡德琳(?)

( )  
〃〃 「湄君小伝」文集卷七  
〃〃 「隨園詩話」卷十三

(袁枚「碧腴齋詩存序」文集卷二八)

其二四 尹慶玉・尹慶蘭・尹慶桂・尹慶霖(尹繼善の四子)

(袁枚「隨園詩話」卷二・三・四・八・十三・同補遺卷四・七)  
〃〃 「答尹似村書」「再答尹似村書」文集卷十九

( )  
〃〃 「尹似村公子詩集序」外集卷三  
〃〃 「寄樹齋雨林」詩集卷十七

( )  
〃〃 「題慶雨林詩册并序」詩集卷十一  
〃〃 「與霖似村兩公子書」外集卷四

其二五 ○ 錢維高(一七三九  
一八〇六)

(袁枚「錢竹初詩序」統文集卷二八)

其二六 ○ 嚴長明(一七三一  
一七八七)

(袁枚「隨園詩話」卷四・五・七・十三・十四)

其二七 ○ 洪亮吉(一七四六  
一八〇九)・○ 顧敏恆(一七四三  
一八〇七)・○ 孫星衍(一七五三  
一八一八)

(袁枚「隨園詩話」卷七・補遺卷五・六)

○ 楊芳燦(一七五三  
一八一五)・○ 黃景仁(一七四九  
一七八三)

(袁枚「答洪稚存書」文集卷十九)

其二八 宋樹毅(?)

(袁枚「隨園詩話」卷十三)

其二九 ○ 鮑皋(一七〇八  
一七八八)・(子) 鮑之鍾(一八〇二  
一八〇二)

(袁枚「隨園詩話」卷二・九)

其三十 錢琦(一七〇九  
一七九〇)・○ 梁同書(一七二三  
一八二五)・吳玉璣(?)

(?)

其三二 ○王友亮 (一七四二) · 申甫 (一七〇六)

其三三 張英 (一七四一) · 沙維杓 (??) · 張崗 (??)

其三三 魯瓚 (??) · 李勉 (??) · 陳浦 (??)

其三三 丁珠 (??) · 黃之紀 (??)

其三三 袁樹 (從弟) (??)

其三三 陳熙 (??) · 吳蔚光 (一七四三)

其三三 何士顥 (??) · 陳古漁 (??) · 方正澍 (一七六八)

〔袁枚〕「心中賢人歌寄錢瓌沙方伯」詩集卷二五

〔袁枚〕「哭錢瓌沙先生」詩集卷三二  
〔錢瓌沙先生詩序〕統文集卷二八  
〔福建布政使錢公墓志銘〕統文集卷二六  
〔隨園詩話〕卷八·十二·十四·補遺卷五·七

〔袁枚〕「隨園詩話」卷三·五·十·十四  
〔題魯星村小像〕詩集卷二九

〔袁枚〕「隨園詩話」卷五

〔袁枚〕「香亭任江城別駕一年」詩集卷二六  
〔隨園詩話〕卷七

〔袁枚〕「題陳梅岑詩卷」詩集卷十七

〔隨園詩話〕補遺卷二

〔袁枚〕「何南園詩序」統文集卷二八  
〔何南園詩選後序〕同卷三二

〔隨園詩話〕卷十四  
〔陳古漁詩概序〕外集卷二  
〔隨園詩話〕卷三·六·補遺卷二

其三八 夫已氏 (??) (袁枚『隨園詩話』卷五)

(生没年表示は主に姜亮夫『歷代人物年里碑傳綜表』による。詩人名は宗廷輔『古今論詩絕句』、吳世常『輯注論詩絕句二十種』その他による。)

(袁枚『小倉山房詩集・文集・統文集・外集』を、それぞれ「小倉山房」を略して記する。)

(『隨園詩話』は主要な言及のみを採った。)

以上の一覧から以下の事実が明らかになる。即ち、袁枚 (一七一六—一七九七) の論詩絶句中に論評される所謂「古人」とは

● 印を付した王士禛・吳偉業・潘耒の三名だけであり、その他の多くは「今人」、即ち袁枚と同時代の、而も下欄に示した袁枚が撰した多くの伝記や詩文序が如実に証明する様に、袁枚と特に深い交際のあつた詩友ばかりである。このうち、○印を付した詩人は袁枚より年少であり、袁枚の交友の幅広さを示す好箇の資料でもある。

そして、これらの事実の当然の反映として、袁枚の論詩絶句においては、元好問や王士禛がそうであつたような、眼前の文壇の情況に厳しく対峙する青年の客気はもはや消え失せ、あたかも『隨園詩話』の世界にも似て、親しい友人知人の懐旧録の様相を濃厚に呈している。これも、時代性や袁枚の性格もさることながら、やはり六十六歳という老熟した年齢の然らしむるところ大であつたと考えられる。

実は、ここで袁枚の論詩絶句の論評内容について個々に検討する必要があるのであるが、その幾分かについて筆者は既に論じた<sup>(7)</sup>ことがあるので、紙幅の関係もあつて、ここには再述を省略する。

新趣向の江戸文人の論評を中心とした頼山陽の論詩絶句は、遠くは杜甫や元好問の影響も確かにあったであろうが、主には袁枚の論詩絶句の啓発を受けて構想されたと思われる。この事について明確に述べた頼山陽の直接資料は残念ながら無いが、いま、論詩絶句をめぐる作者の年齢や論評の姿勢内容、更には江戸後期における袁枚詩の流行等々の諸要素を考慮に入れると、頼山陽の論詩絶句は、杜甫や元好問、王士禛のそれよりは、むしろ袁枚の論詩絶句により大きな直接の類似性を見出すことができる。(むしろ類似性と共に相違点も多々あるのであるが。)以下、このことについて改めて検証してみたい。

まず、論詩絶句を詠んだ作者の年齢から見た場合、頼山陽の四八歳は、どちらかと言えば寧ろ袁枚の六六歳に近く、元好問の二八歳、王士禛の三十歳とは截然と区別されるであろう。言い代えれば、頼山陽の論詩絶句は、袁枚のそれが熟年期の作品であるのに似て中年期熟年期の作品であり、元好問や王士禛のそれに若年期の意気軒昂の頃の作品ではないということである。(ことわっておけば、その論詩絶句詩の最末尾に自分を評して「平生徒いぢぢに詩人と喚ばる」と詠み、五三歳で逝った不世出の天才頼山陽は、蓋し中年の四八歳にして既に熟年の域に入っていたと考えてさしつかえないのではあるまいか。)

そして、このような作詩時期の若年と熟年との違いは、当然ながら、論詩絶句における論評の内容、姿勢の違いとなって現れる。金の元好問、清の王士禛の論詩絶句は、いずれも作者が当時の文壇の現状に強く発憤し、「戯れ」とはいないながら可成り真摯な文学主張を内に秘めている。これには、それぞれの時代の情況背景も当然あるであろうが、何よりも作者の当時の年齢が崇高な理想に燃える若年期にあった事が根底的に大きな要素であった事を見落す訳には

いかない。

これに対し、袁枚や頼山陽の論詩絶句は、むろん文壇の現状に対する義憤は払拭されてはいないものの、作者の友人知人との交友の記録を留めた「懐人」詩の要素の方がより濃厚である。これにも当然時代差は大きく関わるであろうが、より根底的には、作詩の当時、作者が既に老熟の域に入っていた事に大きく関係すると思われる。即ち、両詩ともに青年にありがちな、物事の本質を問ひかける崇高な理想像は既に影をひそめ、代りに友人知人の言行をまとめた備忘録的な傾向が顕著になってくるのである。

更に袁枚と頼山陽の論詩絶句の類似性については、清朝中後期と江戸後期という時代の共通性も認識しておく必要がある。中国の清朝期と日本の江戸期とは、偶も同時代に位置するとはいえ、もとより独立した別個の二王朝であり、これを安易に同一視する事はできない。しかし両者は全く無関係であったかというところも正しくなく、両者の多くの共通性を指摘する事は可能であろう。袁枚や頼山陽の如き自由文人の横行を許した社会背景もその一つである。江戸後期の頼山陽を清初期の王士禛と清中後期の袁枚とに当てはめて考えてみた場合、論詩絶句詩例でも明らかな様に、山陽はむしろ袁枚の方に種々の類似性を見出すことができる。即ち、清初の王士禛にあっては、如何に明末の残滓を払拭して新しい清朝の文風を切り開くかが当面の急務であった。紀昀の『四庫提要』の王士禛條に、

平心にして論ずれば、我が朝開国の初めに当り、人皆明代王（世貞・李（攀龍）の膚廓、鍾（惺）・譚（元春）の織仄を厭ふ。是に於て詩を談ずる者は競ひて宋・元を尚ぶ。既にして宋詩の質直は流れて有韻の語録と為り、元詩の纏豔は流れて对句の小詞と為る。是に於て士禛等、清新俊逸の才を以て、水に範し山を模し風を批し月を抹し、天下に倡ふるに「一字に著せずして尽く風流を得」るを説くを以てす。天下遂に翕然として之に応ず。

と述べるのをその確な論評とする。これに対し、清朝の中後期に生きた袁枚の場合、明朝風気との対峙は既に当面の重要な課題ではなく、あまつさえ実社会から遠く離れて退隠する六六歳の高齢である事も加わって、その論評には



袁枚の友人知人が多く取り上げられることになる。国は違い、事情は同じでないが、頼山陽の場合も、偶然にも彼が江戸後期に活躍し、而も宦途に恵まれない詩人であった事が、その論詩絶句を袁枚の論詩絶句に倣って作る事を可能にした根底の要素であったと言えるのではあるまいか。つまり、どちらも王朝後期の詩人であった事が、袁枚は清朝の、山陽は江戸の詩人についての論詩絶句を結果的に可能にしたのである。

最後に、頼山陽の論詩絶句が直接には袁枚の論詩絶句に拠ったであろうことを推測させるより確かな情況証拠は、江戸後期における袁枚詩の爆発的な流行現象である。頼山陽自身もその論詩絶句其十五中において「復た満口袁枚を説くを為す」と述懐する様に、江戸後期文壇における袁枚詩の蔓延現象は、曾ての平安時代の白居易詩の流行にも似て、夥しいものがあつた。その性情説、性霊説の江戸時代における流行現象に就ては、松下忠氏の労作『江戸時代の詩風詩論』<sup>④</sup>に詳しい引用がある。当の頼山陽は、初めて袁枚の『小倉山房全集』に接した時の印象を次のように「書倉山詩鈔後」中に記している。

市河西野翁（寛齋）長碕より還る。余時に文化十一年九月廿九日歸省し、之に備後（神邊）に遇ふ。其の（長碕の尹に託して『小倉山房全集』を致すを聞き、其の詩の如何なるを問ふ。翁曰く、「硬きを覽ゆ。其の（隨園詩話の言ふ所に類せざる也」と。已にして鈔刻成りて寄せらる。後に又全集を讀むを獲たり。翁の語信に然り。

（一）は筆者、（一）は全書本のまま

書名の『倉山詩鈔』は市河寛齋編『隨園詩鈔』<sup>⑤</sup>六巻のことであろう。同書の寛齋の凡例によれば、文化十年、長崎に赴いた市河寛齋は、詩一五〇〇余首所収の三三巻本『小倉山房詩鈔』を購入し、うち四〇〇余首を鈔出して『隨園詩鈔』を編んだ。後に又詩四〇七〇余首所収の三七巻本『小倉山房全集』を得たが、「それによる増補はしてゐない」（長澤規矩也解題）。（袁枚の「倣元遺山論詩」三八首は三七巻本『小倉山房詩集』の巻二七に所収。）この引用文中に

において、山陽は自分が確かに袁枚の全集を読んだ事を明言し、且つ袁枚についてかなり批判的な言辞を弄している。しかし、明らさまな批判は、実は自分がその影響をもろに受けている事の逆証でもあるのであり、従来しばしば指摘される様に、山陽の詩文中に袁枚の影響が色濃く認められる事は揺ぎないと考えられる。

但し、頼山陽と袁枚の論詩絶句には、上に述べた種々の類似点と同時に、構成上の相違点もまた存在する。例えば、頼山陽の論詩絶句は最末尾に自己批評を以て一連の論詩絶句を総括するが、袁枚の論詩絶句の次の最終詩は、袁枚自身の評というよりは、当時詩壇の一般的な風潮を指したものでらしく思われる。

天涯有客太諗癡

天涯に客の太だ諗癡なる有りて

錯把抄書當作詩

錯りて抄書を把りて 作詩に当てんとす

抄到鍾嶸詩品日

鍾嶸の『詩品』を抄し到るの日

該他知道性靈時

該に他の性靈を知道する時なるべし

しかしながら、奇しくもこの論詩絶句は、山陽が江戸後期文壇の風潮を批判した論詩絶句其十四、十五（前述）の論調に却って相似通うものを持っている様に私には思われるのである。

更には、頼山陽と袁枚とでは、論詩絶句中に取り上げられる人物も時代も当然異なっており、これを安易に同列に置いて比較するのが適当であるかという根本的な問題がある。つまり、両者を全く別個の独立した文学作品として考える事もまた可能である。むしろ論詩であれば、詩人を論評する姿勢は両者ともに貫くものの、山陽と袁枚の論詩の対象となった友人知人は、当然お互いに共通するはずはなく、また評語も概ね一致しない。こう考えれば、山陽と袁枚の論詩絶句を同じ俎上に置いて論じる事はやや無理な様にも思われる。にもかかわらず、本稿においては、山陽に

おける袁枚の影響を背景にしつつ、その友人知人を多く論評の対象とする論詩絶句であるという共通点に注目して、あえて比較的論述を試みることにした。

以上、頼山陽の論詩絶句と袁枚の論詩絶句の論評内容について比較検討を加えてみた。筆者は両者の類似性の追求に性急なあまり、頼山陽の論詩絶句の独自性についての検討が疎かになったかも知れない。また、頼山陽前後の日本の論詩詩例<sup>⑤</sup>についても小稿では検討する余裕が無かった。しかし、例えば事情がどうであれ、頼山陽の論詩絶句は、これを中国の論詩絶句との関連において見た場合、杜甫や元好問や王士禛のそれよりも、袁枚の論詩絶句により多くの類似性を見出すことはほぼ確認し論証できたように思う。その結果、小稿は期せずして江戸後期における日本文学の中国文学受容の一端を垣間見ることになったが、これは筆者には手に余る大きな問題である。今はとりあえずその初歩的基礎的研究として小稿を草し、識者の批判を俟ちたく思う。

(一九九一年十月)

### 註

- (1) 『頼山陽全書』所収『頼山陽詩集』巻十九。
- (2) 『菅家後集』所収。猪口篤志『日本漢詩(上)』(明治書院、新釈漢文大系45) 参照。
- (3) 同一〇六頁、及び安藤英男『頼山陽詩集』(頼山陽選集二、近藤出版社、昭和五七年) 二二五頁参照。また『国史大辞典』の井上鋭夫「上杉謙信」の項を参照。なお、頼山陽の『日本外史』巻十一にも上杉謙信の「九月十三夜」詩を引用する。
- (4) 同『日本漢詩(上)』一一七頁参照。
- (5) 津阪孝綽は宝曆七(一七五七)年に生まれ、文政八(一八二五)年に六十九歳で没した。その没年は頼山陽の論詩絶句が詠まれる二年前に当る。また『夜航詩話』は文化十三(一八一六)年の自序、天保七(一八三六)年の刊であり、頼山陽の論詩絶句が詠まれた文政十(一八二七)年は丁度その中間に相当する。

(6) 杜甫「戲為六絕句」其四に「未だ鯨魚を碧海中に製せず」とあり、また宋・葛立方「韻語陽秋」卷三に「李太白、杜子美詩は皆製鯨手也」とある。「鯨魚を製す」とは詩文の気宇壮大なことの喩え。後出の山陽「論詩絶句」其二七も同様。

(7) 他は助字。東条琴臺「幼学詩話」(日本詩話叢書所収)に示す「陀」の例を参照。陀と他は通ずる。後出其十の勝他も同じ。

(8) 松下忠「江戸時代の詩風詩論」(明治書院、昭和四四年)二六一頁参照。

(9) 「頼山陽全書」所収「山陽先生書後」巻下。

(10) 杜甫の「春日憶李白」詩に「何時一樽酒、重与細論文」と。また後述の元好問「論詩三十首」其一にも「正体無人与細論」と。

(11) 「南郭先生文集」初編卷四。猪口篤志「日本漢詩(上)」一六四頁、徳田武「江戸詩人伝」(べりかん社、昭和六一年)九二頁、及び山本和義「服部南郭」(岩波書店、江戸詩人選集第三巻、一九九二年)五三頁参照。なお、菊池五山「五山堂詩話」補遺卷四に、頼杏坪が頼山陽のこの論詩絶句に次韻して称讃しているのを引き、「叔侄の間、論ずる所の同じからざること此の如し」と述べる。

(12) 他は助字。註(7)に同じ。

(13) 「南郭先生全集」四編巻一。

(14) 「玉山先生詩集」巻四。徳田武「江戸詩人伝」九三頁参照。

(15) 「頼山陽全書」所収「山陽先生書後」巻下。

(16) 「神田喜一郎全集」(同朋舎、昭和六十年)第六巻。

(17) 「蛻巖集」巻四。猪口篤志「日本漢詩(上)」一六〇頁、徳田武「江戸詩人伝」一三三頁参照。

(18) 「徂徠集」巻十八「跋唐詩選」に、「独り奈んせん、近東坊間の諸本、率ね孟浪に属す。不れば則ち何物の狡兒ぞ、巧みに五里霧を作し、芙蓉、咫尺も殆ど弁ずべからず。今此の刻を閲するに、剔抉幾と尽き、頓に旧観に復す」と。日野龍夫校注「唐詩選国字解」(平凡社東洋文庫、一九八二年)参照。

(19) 「神田喜一郎全集」第八巻二二六頁、「頼山陽の『論詩絶句』」。

(20) 「頼山陽全書」所収「頼山陽詩集」巻十九。

(21) 入谷仙介「頼山陽・梁川星巖」(岩波書店、江戸詩人選集第八巻、一九九〇年)一三三頁。

(22) 安藤英男「頼山陽詩集」二二七頁。

(23) 揖斐高校注「五山堂詩話」(岩波書店、新日本古典文学大系六五、一九九一年)一七六頁。また友野霞舟「錦天山房詩話」

頼山陽の論詩絶句と袁枚の論詩絶句(竹村)

卷一〇七にも同様の引用がある。

- (24) 『頼山陽全書』所収「頼山陽文集(外集)」。
- (25) 王士禛「戲做元遺山論詩絕句」其二八にも、「朱弦疏越有遺音」とある。
- (26) 「寧無」を「寧んぞ無からん」と訓めば、山陽が茶山の大句(七古)に肯定評価を与えたことになる。しかし後述の山陽の茶山評には「短古(五古)に長じて長古(七古)に短かし」とあるので、この「寧無」は寧ろ否定評価と読解する。
- (27) 『頼山陽全書』所収「山陽先生書後」巻下。
- (28) 『春水遺稿』別録。また『頼山陽全書』所収「頼山陽文集」巻七。
- (29) 『頼山陽全書』所収「頼山陽文集」巻十二。
- (30) 同卷十三。
- (31) 同卷六。
- (32) 同卷六。中村真一郎「頼山陽とその時代」一八五―一九〇頁。
- (33) 詩仏と山陽との交友は同右三四五―三四九頁に詳しい。
- (34) 『書苑』二一八(昭和十三年)、「雅友」四一号(昭和三四年)に今関天彰「菊池五山」がある。なお『雅友』は九大文学部中野三敏教授より借覧を許された。あつく感謝する。
- (35) 『五山堂詩話』卷三所収。
- (36) 揖斐高校注『五山堂詩話』(岩波書店、新日本古典大学大系六五、一九九一年)。
- (37) 『頼山陽全書』所収「頼山陽文集」巻九。
- (38) 永井荷風の『葦齋漫筆』に、頼山陽のこの論評にあき足らぬ鷺津教堂の論詩絶句に言及する。鷺津のそれは『二六名家詩鈔』卷五所収。
- (39) 『頼山陽全書』所収「頼山陽文集」巻十一、また中村真一郎「頼山陽とその時代」三七―一頁参照。
- (40) 『神田喜一郎全集』第八卷「頼山陽の『論詩絶句』」一二七頁。
- (41) 『頼山陽全書』所収「山陽先生書後」巻下。
- (42) 論詩絶句に関する参考資料として、拙稿「論詩絶句における王士禛の神韻説と袁枚の性靈説」(徳島大学教養部紀要十八、一九八三年)中に言及したものの外に、次の五点を補加する。

○小倉忠恆「王漁洋の論詩絶句」(『雅友』四六一—五二一、昭和三五—三六年)

○李鍾漢『歴代論詩絶句研究』(文学碩士学位論文、ソウル大学、一九八二年)

○同「杜甫の論詩詩に關して」(『中国語文学』八、啓明大学、一九八四年)

○同「論詩詩研究」(『中国学誌』三、啓明大学、一九八六年)

○郭紹虞・錢仲聯・王遽常編『万首論詩絶句』(全四冊、人民文学出版社、一九九一年)

李鍾漢先生には右三論著の惠贈にあずかった。深く感謝する。

(43) 目加田誠「杜甫」(集英社、漢詩大系第九卷、昭和四十年)二五八頁。

(44) 拙稿「論詩絶句にあらわれた王士禛の明代文学批評」(『中国古典研究』三一、一九八六年)参照。

(45) 『小倉山房詩集』卷一七。

(46) もう一人の張英(一七〇八—一七〇八)も存在する。どちらか決めかねる。

(47) 拙考「論詩絶句における王士禛の神韻説と袁枚の性靈説」(徳島大学教養部紀要十八、一九八三年)参照。

(48) 『四庫全書総目』卷一七三、王士禛『精華録』十卷提要。

(49) 昭和四四年、明治書院。

(50) 『頼山陽全書』所収「山陽先生書後」卷下。

(51) 汲古書院『和刻本漢詩集成』第二十輯(補編第四輯)に影印する。長澤規矩也解題。

(52) 頼山陽の身近にあった次の詩人に、更に以下の論詩詩例がある。

○広瀬淡窓「論詩、贈小関長卿・中島子玉」(遠思樓詩鈔卷二)

○広瀬旭莊「論詩」(梅墩詩鈔初編卷二)

「題稻垣木公文稿」(梅墩詩鈔三編卷一)

「星巖集註題辭」

○梁川星巖「読宋金元明清諸家集、各書後」(星巖閑集卷二)

○中島子玉「論詩、效元遺山体」(宜園百家詩初編卷三)

○垣内溪琴「論詩絶句二十首」(溪琴山人第四集)

これらの江戸後期における論詩詩の流行については、稿を改めて論じたい。

頼山陽の論詩絶句と袁枚の論詩絶句(竹村)